



木材加工最前線

Contents

◇木材高度加工研究所から

①ウッドショックに国産材を思う	秋田木高研 元所長 飯島 泰男	2
②中大規模木造建築に関する研究	准教授 岡崎 泰男	3
③木材のナノから先の見えない世界	助教 安藤 大将	3
④第1回研究助成金に採択されました		4
⑤基礎講座が再開されました		4
⑥潮目は変わったか 売行きは7割～筑波の木材市場で秋田展～		4

◇木材加工推進機構から

・あきた木造建築塾 特別講演会		5
・ウッドファーストあきた木造・木質化建築賞		5
・木材利用提案コンクール		5
・中国木材能代工場の計画説明会を開催		6

新型コロナ禍で増えた木高研の見学者

将来の担い手創出につながる可能性も



新型コロナウイルス感染症の拡大で昨年から今年にかけて、木高研の見学希望者が目に見えて増加しています。令和3年度は秋田県内の小中高校生の総合的な学習から大学校ほか一般市民・林業・木材関連業界など一定程度の専門知識を有する団体の見学も多く、11月末までの予定を含めて13団体・284人の申し込みがありました。2年度と比べて団体数ではほぼ2倍、人数では4倍に増加する勢いです。

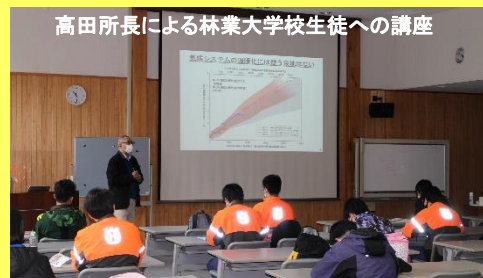
これまで小中学・高校生の修学旅行や遠足、社会科見学、移動教室、体験活動など校外でおこなう活動は、児童・生徒の学校生活に潤いや秩序と変化を与え、思い出に残るようにする有意義な教育活動ととらえられていたようです。しかしそれに勝るとも劣らぬ校外活動が身近にあることを昨年からのコロナ禍は教えてくれました。

とりわけ林業・木材関連産業の集積が多く、多くの業種が秋田で呱呱の声を挙げ、紡がれてきた歴史や地域での位置付けに思いを馳せてみることの意味の大きさを知らされます。若い児童・生徒を中心とする世代が新しい時代を引き寄せる加工技術の拠点である木高研で得られた知識と体験は、将来の担い手創出につながるかも知れません。

見学会では木高研の教員による説明で、森林や木材が多彩でさまざまな表情を持った存在であること―、このような話を目を輝かせながら聞き入っていました。森林とスギなど多彩な木材の付加価値を高める加工、そして循環的で効果的な利用は地球温暖化防止や生物多様性の保全と持続につながり、今日的なテーマとして注目されているSDGs（自然と社会の持続可能な開発目標）の達成に適うものであることを理解したようでした。

研究所内の見学では、研究者が木材の特性を生かして開発した新製品をはじめ、すでに市場に出回っている加工木材や注目される新技術に寄せる関心の高さがうかがわれました。木材の強度や耐火性能を高めて近未来の建築に使われる新しい素材や、脱炭素社会の実現を見据えて木材による地球にやさしい建築構法を開発するために必要な試験設備類には身を乗り出してのぞき込み、メモを取る児童・生徒たちの姿がありました。

新型コロナウイルス感染症の拡大で、図らずも出会うことになったたくさんの見学者の皆さんが、高度な木材利用の明日を見据える研究拠点と、それを支える地域の林業・木材関連産業は予想以上に近いところで共存していることに気が付いてくれたかも知れません。そうだとすれば、森林を活かし、木材を使った生活や社会が構築されるまでの時間は、また少し縮まった可能性があります。



ウッドショックに国産材を思う

秋田木高研 元所長

木材加工推進機構 顧問 飯島 泰男

久しぶりに推進機構から表記の内容に関する原稿の依頼があった。気軽に引き受けたのだが、退職後、この方面の興味は薄れてきており、情報もほとんど持ち合わせていないので、困った。そこでネット情報をチェックし、これらをネタに紙面を埋めていくことにしたのだが、これに関する情報は実に多く掲載されているし、業界の方々にはさらに生々しいものがあるのだろうかと思う。認識不足の点があるかもしれない。この点、予め御容赦願っておく。

まず「ウッドショック」とは海外の木材需要の増大と供給不足で日本に輸入材が入って来なくなり、それによって国産材の需要も増え入手困難になるという状況のことを指しているのであるが、この話題のうち、まず気になったのは、今回が「第3次」だということ、である。

調べると「第1次」は1992～93年で、米国の絶滅危惧種であるマダラフクロウの保護のための森林伐採規制による輸入材不足。これにより輸入材は欧州材（特に北欧材）、NZ材、北洋材、チリ材に多様化していった。ただし国内材の杉の代替や価格高騰はなかった。そして1995年に阪神淡路大震災が起こり、欧州材の輸入が増大していくことになる。

「第2次」は2006年のマレーシアでの伐採規制によるもので、南洋材が不足し、ラワン製材合板の不足・高騰につながった。

以上の第1次、第2次では比較的短期間でウッドショックが落ち着いている。これは輸入材率が高く、それらの供給量が回復すると、それによって価格も安定したため、といわれている。

ただ今回の「第3次」の場合、その発端は過去のような資源問題ではなく、コロナ禍を契機とするアメリカや中国など海外の様々な木材需給の変化や木材輸送を担う船便や荷役人員の不足といわれ、それにより日本へ海外産の木材製品が供給されなくなっているわけだ。

しかし、現在、日本の木材自給率は年々上がってきているものの、最近の在来工法住宅の調査結果によれば、国産材率は梁材（横架材）10%以下、柱材50%前後、羽柄・下地材40%以下といった数値になっている。もし建築用木材の大部分が国産材で賄えている状況であれば、こうした海外の諸事情による影響はかなり避けられることになる。そしてウッドショックに関する情報を見ていると、「これを機に国産木材活用を」といった論調は多い。

曰く「木材のいい所は、国内で生産できる資源で、半分を輸入に頼っていたため、今すぐに増産体制を整えら

れる状況ではないかもしれないが、輸入材のように船が止まれば完全に供給ストップしてしまうということではなく、林業からの流通をしっかりとつなげればある程度の生産ができる。60年前に植林して成長した日本のスギやヒノキでしっかりと木材を自給できる林業をつくるチャンスだ。」

また「日本は世界有数の木材輸入国。だがウッドショックの中、品質基準が厳しいのに価格が相対的に安い日本市場の優先順位は下がっている。木材の流通が他国向けに切り替わると、なかなか日本向けに戻せない。それだけに、ウッドショックを逆手にとって、国産木材の活用を活性化する好機とすることが求められている。」といった意見もあった。

こうした記事を読んでも、「ごもつとも」としか言いようがない。

確かにいま一番必要なのは、林業から木材生産までの一貫した仕組づくりであることはよくわかる。木材を生産する人たちが多い北海道内では、「値上がりはチャンスだ」という声も出ており、北海道産の木材を積極的に使おうという動きがあるとのことだ。たとえば「トドマツ」はことし6月の時点での道外への出荷量が去年の同じ月に比べて、36%あまり増えている。ただし価格の変動は少ない。この原因の一つは乾燥設備の不足なのかもしれない。また、伐採や木材加工にあたる人も足りないらしい。

ところで、今回、最も大変だったのは中小工務店なのだろう。多くの工務店ではことし初め、木材の価格がまだ安かったところに仕入れた材料を取り崩しながら、建設作業にあたっているという。

そこで、2021年1月以降のいくつかの木材製品について卸売価格の推移を表にしてみた。これを見るとまず3月頃、北米や欧州からの輸入材の価格が徐々に上がり始めていったことはわかる。しかしすべての木材製品が均等に値上がりしたわけではない。例えば9月時点での上昇率（表では「1月比」）を見ると、1月の2倍近くにもなったスギ正角（KD）、ベイマツ平角、ホワイトウッド間柱とせいぜい1割上昇のスギ正角、エゾ・トド正角の2つのグループに分けられる。後者はいずれも未乾燥材であることから、これまで輸入材を使っていたビルダーなどが急いですべて国産材に切り替え、買い求めるようになった、という単純な図式で片付けてはいけなことを示している。

それにしても「ウッドショック」と「コロナ騒ぎ」の終息はいつなのか、見当がつかない。

表. 2021年1～9月の木材卸売価格の変動（等級はすべて2級、正角は105mm角、林野庁資料による）

	スギ正角 (KD)	同1月比	スギ正角	同1月比	エゾ・トド正角	同1月比	ベイマツ平角	同1月比	ホワイトウッド間柱	同1月比
1月	65,800	1.000	62,200	1.000	61,400	1.000	65,200	1.000	61,700	1.000
2月	65,900	1.002	62,200	1.000	61,400	1.000	66,500	1.020	62,900	1.019
3月	66,700	1.014	62,500	1.005	61,400	1.000	70,100	1.075	66,500	1.078
4月	75,300	1.144	64,500	1.037	61,800	1.007	78,100	1.198	74,900	1.214
5月	86,600	1.316	65,400	1.051	61,800	1.007	83,100	1.275	84,700	1.373
6月	111,800	1.699	70,100	1.127	62,000	1.010	94,800	1.454	101,500	1.645
7月	126,700	1.926	71,400	1.148	64,500	1.050	99,000	1.518	111,800	1.812
8月	130,600	1.985	68,900	1.108	66,800	1.088	111,300	1.707	122,000	1.977
9月	133,500	2.029	68,900	1.108	67,300	1.096	117,600	1.804	126,600	2.052

中大規模木造建築に関する研究

准教授 岡崎 泰男

木材のナノから先の見えない世界

助教 安藤 大将

平成22年に制定された「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が改正され、法律の題名が「脱炭素社会の実現に資するための建築物等における木材の利用の促進に関する法律」変わるとともに法の対象が公共建築物から建築物一般に拡大されるなど、木造で中大規模建築を建てる環境が整いつつあります。中大規模木造建築の普及を促進するためには使用される部材の開発等の研究が必要であり、研究所では以前から関連する様々な研究に取り組んで来ました。

その中で私が関与してきたテーマとしては1) スギ長尺スパン梁部材の開発 2) スギ一般流通製材を用いたトラス梁の開発 3) 薄物CLTの開発 4) 超厚合板の開発などがあります。

1) および2) は過去の最前線(72号. 86号. 89号. 91号)で紹介されており、これらの研究成果を活かす形で木造のコンビエンスストア、畜舎が実際に造られています。



写真1 薄物CLT
上: 3層プライ30mm、中: 同36mm、右: 5層57プライ50mm

3) の薄物CLTの研究は、通常のCLTよりも薄い厚さ10~12mmのラミナを使ったCLT(写真1)の開発と普及を目的とした研究で、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所等と共同で行って来ました。こちらの研究はほぼ終了し、曲げ性能、せん断性能等の基礎物性測定、床倍率の試算結果等、設計に必要な数値をまとめ、「国産スギ・ツバイフォー材を用いた複合部材の活用マニュアル」(近日中に公表予定)の中で公表しています。

最後の4) ですが、中大規模木造建築の構法の一つとして「マッシュホルツ構法」と呼ばれる、鉄筋コンクリート造のコンクリートの壁・床の代わりに厚い木質パネルを使用する構法がありますが、その材料として最近欧米で注目されているMPP. 日本では超厚合板と呼ばれる材料の開発と普及を目的とした研究となります。

写真2 試作された超厚合板
左: 厚さ60mm、右: 同140mm



昨年度より日合連が中心となり超厚合板の試作および性能評価試験事業を行っており、それに参画する形で研究を開始しました(写真2)

具体的な研究成果が出て

くるのはこれからになりますが、既に西北プライウッドが50リ合板(国産杉の単板を積層)のJAS認証を取得するなど、着実に成果を挙げています。

近年、木質バイオマスの利用においてセルロースナノファイバー(CNF)などが注目されています。電子顕微鏡などの観察により、木材においてもナノスケールの観察は可能で、CNFなどの木材繊維は細長い紐状の物質として見えてきます。では、それよりも小さな世界はどんなものなのでしょうか? それは化学構造で表すことができます。バイオマスの場合、多糖類(セルロース、ヘミセルロース)およびリグニンが含まれており、それぞれ独自の化学構造を持っています。“化学構造”というと多くの人がアレルギーを起こしてしまいがちですが、下記の色分けした化学構造(模式図)を見ると、意外にも楽しいもので、多様な化学構造であることがわかります。

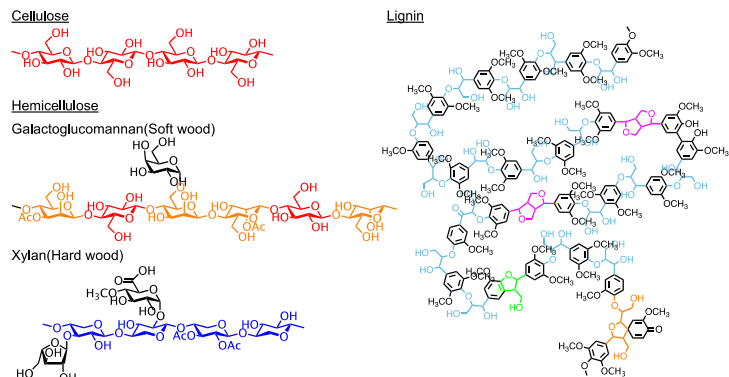
まず、多糖類は単糖(グルコース、マンノース、キシロースetc)がエーテル結合で繋がった高分子です。木材に最も多く含まれているセルロースはグルコース(赤色)が繋がった多糖類です。また、ヘミセルロースは、針葉樹ではガラクトグルコマンナンが、広葉樹ではグルクロキシランが主要なものとなっています。グルコマンナンはグルコース(赤色)とマンノース(橙色)がだいたい1:1~1:3の割合で、キシランはキシロース(青色)が連続して、繋がった多糖類です。

次に、リグニンですが、複雑な構造をしていますよね。簡単に説明すると、ベンゼン環(黒色)がいろんな結合で繋がった分子と見る事ができます。実際に含まれる結合の種類は約9種類ほどあるのですが、主要な結合に絞ると3種類です。

図に示す、β-O-4結合(水色)、β-5結合(緑色)、β-β結合(紫色)です。含有量は、針葉樹ではβ-O-4結合、β-5結合、β-β結合の順で、広葉樹ではβ-O-4結合、β-β結合、β-5結合の順で多くなっています。

普段、身近に感じている木材ですが、違ったスケールで見ると、このような高分子が混合した複合体となっています。なぜ、こんなに複雑なのか? その理由はわかりません。ただ、木は植物で生物であるので、光合成から始まる一連の生合成によって、それらの成分はつくられています。化学構造を見ると“生物の凄さ”をただ感じるばかりです。

いかがでしょうか? 少しは化学構造のアレルギーが解消されたでしょうか? 機会があれば、次回は木材の水酸基について書こうかなと思っています。



(一財)東光虹川ものづくり財団

第1回研究助成金に採択されました

秋田木高研 大学院生 熊本 隆人

このたび、一般財団法人 東光虹川ものづくり財団研究助成金にて、「地域産木材資源の曲げわっぱへの利用可能性と白飯の保存効果の検証」という研究タイトルでご採択をいただきました。本事業は大館市および秋田県における地域振興の促進や、地域住民の生活の向上のためのものづくりの発展を目指しています。

その中で、大館の“曲げわっぱ産業”と“地域の未利用広葉樹”に目を向けて、地域の特色を出しつつ曲げわっぱ産業の発展に貢献できるような森林資源利用の可能性に着眼しました。



大館周辺では伝統的産業である天然スギを用いた曲げわっぱが発展し、近年は、天然スギから造林スギへの転換を機に、スギの材質特性や生育環境等の知見の蓄積により、曲げわっぱに適した“曲げやすいスギ”の探求への関心が広まっています。一方で、秋田県や大館周辺には特色のある広葉樹であるサクラやニセアカシア、リン

ゴなどがあります。東北地方で広く分布するブナやナラに加えて、これらの広葉樹にも曲げわっぱの形状に適した“曲げやすい広葉樹”の検討をおこなっていきます。

また、曲げわっぱの良さである“おひつ”で、炊きたての白飯の食味を時間が経った後も保つ効果は、経験的に認められてはいるものの、その客観的根拠は漠然とされています。白飯の曲げわっぱ容器への保存前後における含水率や粘りを検証することによって、曲げわっぱで白飯を保存することによる保存効果を客観的に捉えやすくなると考えております。

本研究では木材の曲げ加工性と白飯の食味保持機能という、木材加工学と食品学を組み合わせた観点に新規性を見出し、分野横断的な新たな挑戦であることに研究の意義を感じています。加えて、大館市や秋田県全体のこれからの木材加工業の一助となる研究成果を得られるよう頑張っています。



大館まげわっぱ

基礎講座が再開されました

コロナ禍の影響で延期されていた「木材基礎講座」が再開されました。この講座は、木材関連の各分野について、生産や利用・加工などの問題や疑問を中心とした課題について学習することを目的に一般市民をも対象として開設しています。今年テーマは「東日本大震災と木材利用～何ができたか、何が変わったか～」を取り上げ、11月16日を第1回目、11月30日を第2回目として毎週火曜日に連続4回シリーズとして開催します。

初回となる第1回目は、秋田県の震災復興への支援や取り組みと題し、県農林水産部林業木材課の齋藤健志主査と(株)ウッディさんない高橋嘉男専務取締役がそれぞれ講演をおこないました。

齋藤主査は、被災地への森林土木担当職員や林業研究研修センター研究員の派遣など人的支援事業や避難所用木質パーティション設置など木材供給に関する説明。

高橋専務取締役は、被災で発生した木材を利用したチップ舗装や仮設木橋、津波で消滅した海岸防災林のマツ林復旧するための丸太防風柵、木製静砂垣設置状況など、両人とも写真を交えて、熱心に講演しました。

第2回目は、復旧・復興における土木分野での木材利用についてと題し、木高研の野田龍准教授がオンラインで講演しました。

今後の開催予定は次のとおりです。

- ・第3回目 12月7日(火) 18:00～19:00
題名：移動式簡易製材機(オンサイト製材機)を活用した震災地支援
講師：木高研 教授 高田 克彦
- ・第4回目 12月14日(火) 18:00～19:00
題名：木材利用と地域再生
講師：木高研 准教授 渡辺 千明

潮目は変わったか 売行きは7割

～筑波の木材市場で秋田材展～

今年も木材需要が高まりを見せる時期を見込んで秋田県木連の主催による「秋田材展」が11月18日につくば市の東京木材相互筑波市場で開催された。関東・首都圏で秋田スギ製材品と各種木材製品の販路拡大を目指すために開催される展示会は筑波では4回目。今年も秋田スギの羽柄材や柱角、造作材や銘木的な厚板をはじめとする製品が県内5社から100㎡ほどが出品された。

春から夏場まで外材入荷の減少や価格高騰で国産材の代替需要が本格化して荷動き、市況ともに活況を呈した関東のマーケットはウッドショックの増埒(るつぼ)となった。スギの筋交・間柱やタルキなど小角類に引合いがあったが、秋口以降の荷動き縮小で国産材の需要動向の潮目に変化が訪れていることをうかがわせた。

㎡10万円台が定着した感があったKD(乾燥材)間柱やタルキ類も販売の唱え価格が受入れてもらえず、林場でのセリも渋くて緩慢であった。外材の入荷が徐々に回復しつつあるとはいえ、海上運賃やコンテナ不足に為替の変動も加わってコストの高いものになっているという。問屋や販売店も高く仕入れた在庫との見合いでこの時期の手当では慎重になっていた。

冬場を控えて、すぐにも必要なものには寄りつくが価格は抑えられた。秋田では依然として原木高が続いていることもあって出荷者は安くも売れない。このため商談のまとまりも少なくなり、「秋田材展」のでは7割ほどの売上げにとどまった。残り3割がいわゆる元落ちで次回以降の販売に持ち越された。



あきた木造建築塾 特別講演会

『日本初の高層純木造耐火建築物への挑戦』～OYプロジェクトを通じて～



県産材を活用した非住宅建築物の木造・木質化を推進するため、秋田県と木材加工推進機構では、建築に携わる方々を対象にあきた木造建築塾を開催しています。11月26日に秋田市の秋田県JAビルにて、あきた木造建築塾特別講演会を開催、講師は株式会社大林組設計本部の高山峻氏を招いて「日本初の高層純木造耐火建築物への挑戦」という演題で講演していただきました。

近年、環境への関心が高まっており、持続可能な社会に向けた各企業の積極的な取組みが求められています。大林組では培ってきた大規模建築のノウハウを活かし、木質大型建築に取り組んでいます。

現在、研修施設であり自社施設である地上11階建ての「OYプロジェクト」を建設中で、来年3月に竣工予定です。この施設は、日本初かつ世界的にも類を見ない建築基準法における「主要構造部(柱・梁・床・壁)」にあたる地上の躯体すべてが木材で構成される『純木造』です。適材箇所にはCLTやLVLを使い、木材使用量は約1,945m³です。1階の柱には、3時間耐火仕様のメガウッドを適用しています。躯体及び内装材の木材は、約1,325tのCO₂、約360tの炭素を固定していると換算され、3.6haのスギ人工林が、50年間で吸収する炭素量に相当します。LCAにおいての地球温暖化ガス排出量は、S造に比べて1/2、RC造に比べて約1/4になります。また、構造重量ではRC造より50%、S造より10%低減され、支持杭なしでの計画が可能になり、工期短縮やコスト低減に寄与しています。

以上のような現在の取組みや施工事例を紹介した高山氏は「大林組は木と共に巡る未来を拓くために、木造木質建築プロジェクトチームを立ち上げ、設計や施工技術の開発はもちろん、プロモーション・啓蒙や森林ビジネス展開にも取り組んでいます」と語りました。

ウッドファーストあきた木造・木質化建築賞



ウッドファーストあきた木造・木質化建築賞の入選者表彰式が11月26日に秋田市の秋田県JAビルで行われました。この賞は、秋田県内の木造・木質化のモデルとなる優れた建築物を県民に広く紹介するために開催しています。応募対象は施設(施主、設計者、施工者の三者が連盟)になります。県産木材の需要拡大を推し進め木造・木質化のモデルとなる優れた建築物を表彰するもので、木材の特徴や木の良さを活かした作品を6月30日から8月20日まで募集しました。

応募数は木造A部門が2点、木造B部門が2点、内装木質化部門が4点、リノベーション部門が3点、屋外空間部門が1点の計12点で、施設数は11施設でした。

審査会で、次のとおり受賞施設が決定しました。

- 【木造A部門】 最優秀賞：湯の駅おおゆ
特別賞：コアニティー
- 【木造B部門】 最優秀賞：美郷アトリエ
- 【内装木質化部門】 最優秀賞：WANTS AND FREE
特別賞：秋田駅トピコ郵便局
特別賞：ABS秋田放送本社屋
- 【リノベーション部門】 最優秀賞：Newテラス広小路
特別賞：アトリエ アルヴェ

『講評』小杉栄次郎審査委員長(秋田公立美術大学)

入賞作品は、ランドスケープ(景観等)と一体となった建築、地場の木材をしっかりと活用するシステム、木の使いどころを考えている施設など、意匠的にもすばらしく創られている物が評価されました。

今後もこの賞が皆さんの納得できる賞であり続けるよう、関係者と育てていきたいと思っております。

木材利用提案コンクール～夢広がる木の空間の創造～

令和3年度の木材利用提案コンクールの入選者表彰式が11月26日に秋田市の秋田県JAビルで行われました。



この提案募集は、秋田県内の専門学校・短期大学・大学に在籍し、建築を学んでいる学生を対象に、木材を利用した非住宅建築物や、木材を使用して、これからの社会で必要と考えられる空間づくりにつながるアイデアを募るために行われたもので、8月23日から10月29日までの募集期間に計21点の応募がありました。

応募締め切り後に行われた審査会では、慎重な協議の結果、次のとおり受賞者が決まりました。

- 【最優秀賞】川野 菜々美(秋田県立大学)
- 【優秀賞】後藤 汰良(秋田工業高等専門学校)
種倉 栞(秋田工業高等専門学校)
- 【優秀賞】前田 亘輝(秋田県立大学)
- 【特別賞】菊地 小雪(秋田県立大学)
- 【佳作】加藤 純麗(秋田県立大学)
- 【佳作】外館 凌(秋田県立大学)
- 【佳作】村田 悠翔(秋田県立大学)
- 【佳作】鈴木 貴大(秋田県立大学)

『講評』鎌田光明審査委員長(秋田工業高等専門学校)

応募作品は、どの作品も非常にレベルが高く、審査をする上で充実した審議となった。その中でも入賞された作品は、発展性のある木材の空間利用や木材利用の促進、しっかりと木材を材料としてとらえているなど、構造的な面でも高く評価できる作品になっていたと述べました。

今後も、「木材利用の新規性」「木材をどう使うか」「夢広がる新しい提案」を期待していますとのエールを送っていました。

12月24日に秋田市文化会館で「中国木材能代工場の計画説明会」を開催

この春、日本で最大規模を誇る製材業の中国木材(株)(本社：広島県呉市)が能代市工業団地への進出を明らかにした。11月には誘致企業として秋田県と能代市が認定。当初の計画では秋田スギ原木消費量が年12万m³とされていたが、直近の計画では24万m³に増えている。10メガワットだったバイオマス発電は2倍の20メガワットに、また集成材用のラミナや柱角、羽柄材などを挽く製材工場のほか、新たに集成材工場を建設してそこで集成材を生産することになった。

このほか当初180名とされていた従業員(うち140名は地元採用)の計画が280名に拡大し、地元採用が200名程度に膨らんだ。操業開始時は40名ほどでスタートする計画のよう。こうした一連の規模拡大で当初200億円とされていた事業費は25%アップの250億円に膨らんだ。さらに、令和6年4月の試験稼働開始は令和5年12月に4ヶ月ほど前倒しされている。

原木消費量は県内の製材工場としては最大規模だから、既存のA材を使う製材工場は原木の不足を懸念する。合板工場も安定的な原材料の調達に影響が出てくるだろう。

その原木手当てをどう進めるのか、製品の販売で既存業界と競合することはないのか、さらには原木の消費量が増えることで素材生産業界はいかに対応するのか、再造林対策をどうするのか。……諸々の課題が現実化する中で秋田県木連は宮崎県を中心とする九州方面での調査報告を兼ねて、中国木材関係者を招いて「能代工場(仮称)の事業計画説明会」を開催する。

日時は12月24日午後1時半から4時半まで。会場は秋田市の秋田市文化会館小ホール。秋田県木連関係者による「宮崎県の調査報告について」と中国木材取締役生産本部長で新工場進出担当の石橋正浩氏が「能代工場(仮称)の事業計画説明会等について」を語る。

秋田県木連では「能代市に工場を建設するとはいえ、原木の調達や製品の販売などでは県内全域の関連業界にも影響が出ることになる」として、関連する行政機関や川上の素材生産業界、森林組合、合板やチップ業界にも参加を呼びかける。当日は参加者との間で質疑応答も予定している。

参加は無料だが事前の参加申し込みが必要とされている。

お知らせ(開催予定のイベント・会議情報など)

令和3年12月 7日(火)	吉貞戸田市場で「秋田材展」	埼玉県
同 日(火)	木高研の第3回 基礎講座	木高研
12月14日(火)	木高研の第4回 基礎講座	木高研
12月17日(金)	第5回 あきた木造建築塾	秋田市
同 日(金)	木材保存士登録更新講習会	東京都
12月21日(火)	木高研の所内セミナー・会議	木高研
12月24日(金)	中国木材能代工場の事業説明会	秋田市
令和4年 1月 5日(水)	能代商工会議所の新春の集い	能代市
1月15日(土)	和の住まい推進リレー シンポジウムinAKITA	秋田市
2月上旬予定	令和3年度 木材高度加工研究所講演会	能代市内を予定

人事消息

◇木高研教授(木質構造・木材物性)であった中村昇氏は9月末で退職し、岡山大学環境理工学部の特任教授に就任しました。

◇木高研特任助教(木材耐久性・エクステリアウッド)の大澤朋子氏は9月末で退職し、岩手県立大学短期大学部生活科学科の教授に就任しました。

木材加工推進機構の事業をご利用ください

1 顧問による情報提供活動、経営へのアドバイス

賛助会員企業などからの要請を受け、推進機構の顧問が直接訪問して情報提供や経営へのアドバイスなどを行います。また、業界団体等が主催する講演会や研修会の講師も受け付けております。

2 技術コンサルタントによる指導

木材に関する知識及び経験を有する専門家を「技術コンサルタント」に委嘱しており、木材関連企業の技術向上のお手伝いをいたします。製品開発や製造工程に関する技術的なことなどお気軽にご相談ください。

3 依頼試験の実施

企業等からの依頼を受けて「強度」「含水率」「接着性能」「ホルムアルデヒド放散量」などの各種試験を木材高度加工研究所の協力を得て行っています。詳細は当機構のWEBサイトをご覧ください。

